

原著論文

## 初発がんサバイバーのストレングス

### The Strengths of Primary Cancer Survivors

岩本真紀 (Maki Iwamoto)\* 藤田佐和 (Sawa Fujita)\*\*

#### 要 約

目的：初発がんサバイバーのストレングスを明らかにし、がんサバイバーの力に焦点をあてた看護援助の示唆を得ることを目的とした。

方法：再発・転移のない初発がんサバイバー19名に対し、半構成的面接を用い、質的記述的に分析した。

結果：初発がんサバイバーのストレングスとして、“自分を信頼して他者とともに生きる力”と“自分の人生を創造して生きる力”の2つの生きる力が明らかになった。初発がんサバイバーは、“自分を信頼して他者とともに生きる力”を基盤に“自分の人生を創造して生きる力”を発揮して、がん罹患した後の人生を自分らしく豊かに生きていた。この経験は、さらに、“自分を信頼して他者とともに生きる力”を強化していた。

結論：看護者は、初発がんサバイバーを社会の中で自立して生きる一人の人間として捉え、その生きてきた過程を尊重し、強みを引き出すことで、がん罹患した後のQOLを向上できると考える。

#### Abstract

Purpose: This study aimed to examine the strengths of primary cancer survivors, and provide advice on nursing support capitalizing on such strengths.

Methods: The participants were 19 primary cancer survivors, experienced no recurrence and/or metastasis. Semi-structured interviews were conducted to collect data, and the interview results were analyzed qualitatively and subjected to descriptive analysis.

Results: We extracted two main categories as the strength of primary cancer survivors: “the strength to live together with others to trust their own” and “the strength to live and to create their life”. Primary cancer survivors were alive and enriched themselves with life after cancer based on the “the strength to live together with others to trust their own”. “the strength to live and to create their life”. This experience further strengthened “the strength to live together with others to trust their own”.

Conclusion: By respecting primary cancer survivors as a person living independently in the society, respecting the living process, and drawing out the strength, the quality of life after having cancer of primary cancer survivors I think that it can be improved.

キーワード：ストレングス がんサバイバー 初発

#### I. はじめに

がんは1981年より日本の死亡原因の第1位となり、がんへの罹患は脅威であるといえるが、治療の進歩により、がん罹患した後も長期間に生きることが可能となっている。特に、初発が

んサバイバーは、入院治療を終えて初めて自宅に戻った後も、身体的症状やボディイメージの変化を体験しており、さらに自らの身体の変化を再発の徴候や転移と結びつけて心配している。退院後は、入院中と比べて医療者の支援を受けにくく、がんサバイバーは自分の力を発揮して、

\*香川県立保健医療大学

\*\*高知県立大学

がんとともに生きていかなければならない。そのためには、がんサバイバーの苦悩を取り除く支援を行う一方で、がんサバイバー自身の力に注目し、それを引き出し、高めていくための支援も重要(秋元, 2004)といえる。

1980年代後半、問題や欠陥に焦点をあてることにより援助者主導の支援に偏ったことによる反省を背景として、ストレングスの概念が登場した。ストレングスは、援助者が問題や欠陥に焦点をあてるのではなく、上手さ、豊かさ、強さ、たくましさ、資源に焦点をあてることを強調し、援助観、人間観に転換を迫ると同時に、治療中心の実践過程を、エンパワーメントを目的とした実践に転換させる視点でもある(狭間, 2001)。Cowger (1994) は、ストレングスをエンパワーメントの燃料であり、エネルギー源であると定義しており、Miley (1998) は、生来もっている能力や獲得した才能、発達させてきたスキルなど、私たちが得意であると思うものと述べている。つまり、ストレングスは、誰でも、どのような状況にある人でも、まだ発見されていない無限の力があるという前提のもとに、個人のもつ力を尊重し、活かしていこうとするものである(Walter, 2009)。そして、ストレングスの実践への活用についてRappら(2006)は、精神障がい者のストレングスモデルを構築しており、Beckyら(2000)は、高齢者のストレングスモデルケアマネジメントを開発している。このようにストレングスを基盤とした援助方法が開発され、その効果としてQOLの向上(Rapp, 2006; Becky, 2000)やwell-being(Rapp, 2006; Lewis, 2011)が報告されている。がん看護学領域においても、がんサバイバーが多くストレングスをもつこと(Rotegardら, 2012)は報告されているが、いまだ研究は少なく、ストレングスを基盤とした援助方法の開発までには至っていない。

そこで本研究は、初発がんサバイバーのストレングスを明らかにし、がんサバイバーのストレングスを基盤とした看護援助について検討することを目的とする。看護者は、今抱えているがんサバイバーの問題を解決しながらも、ストレングスに着目することにより、がんサバイバーが自らの力を発揮して、自分らしく、豊かに生

きることを支援していくことができ、がんに罹患した後のQOLの向上が期待できると考える。

## II. 用語の定義

先行研究(岩本ら, 2013)を参考に、初発がんサバイバーのストレングスを、がんと診断されても、周囲との結びつきを実感しながら、がんに挫けないエネルギーと自分の強みを活かして、がん罹患した後の人生を自ら創造していく力と定義した。

## III. 研究方法

### 1. 研究のデザイン

ストレングスは、社会との相互作用の中で、その個人が意味づけした主観的な世界を理解し、支援していこうとするもの(山口, 2009)である。がんサバイバーのストレングスはほとんど明らかにされていない概念であり、がんサバイバーが社会の中で生きている経験を詳細に分析することにより、ストレングスを明らかにできると考え、本研究のデザインを質的記述的研究とした。

### 2. 研究参加者

初めてがん診断され、治療を受けて退院し、退院後3カ月から3年以内の初発がんサバイバーとした。この時期は、初めて自宅で様々な困難に直面し、その困難を自ら対処していく時期であり、がんサバイバーとしてこれからの人生を自らの力を発揮しながら、自分らしく生きていく上で重要であると考えたからである。再発や転移の徴候がみられる者は倫理的に除外した。

### 3. データ収集方法

外科外来の責任者と外来看護師長に研究参加者の選定と紹介を依頼し、紹介していただいたがんサバイバーに対して、研究者が研究協力の依頼をした。同意が得られたがんサバイバーに対して、インタビューガイドを用いた半構成的面接を実施した。面接内容は、「がんや自分の健康についての捉え方」、「退院後の生活や体調」、「今後の生き方」、「自分の強みや長所」等とし、

がんと診断を受けてからの経験を自由に語ってもらった。その時に何を感じ、考えたか、またなぜそのように考えたかを問いかけ、自らの強みや長所を引き出すように努めた。データ収集は、2013年2月から2014年3月に実施した。面接日時は、研究参加者の希望に応じ、面接場所は静かで話がしやすい環境を確保した。面接回数は1～2回とし、同意を得た上でICレコーダーに録音した。

#### 4. 分析方法

録音した内容を逐語録に起こし、事例ごとにデータを熟読して、語りの意味内容を把握した。初発がんサバイバーがどのようなストレンスを発揮しているかに着目し、ストレンスについて語られている箇所を抽出した。そのデータが、研究参加者にとって何を意味しているかを検討し、その意味を損なわないようにデータに忠実にコード化した。コードの類似性と相違性を検討し、抽象度を上げてカテゴリー化した。さらに、カテゴリー間の関係性を分析し、図式化した。分析にあたり、データと解釈に矛盾はないか、解釈に飛躍はないかを研究者間で検討

を重ねた。

#### 5. 倫理的配慮

研究参加者に、研究の主旨と方法を説明し、研究への協力は自由意思であること、研究協力の有無により不利益を被ることはないことを文書と口頭で十分に説明し、同意を得た。がんサバイバーの語りの中で、辛かったことや苦しかったことを思い出す可能性も考えられる。話したくないことを無理に話すことはないことを説明し、インタビューに答えることに伴う身体的、心理的負担について配慮しながら面接を行った。面接により研究参加者の状態が変化した場合、主治医及び外来看護師にもフォローしていただくように依頼した。本研究は、高知県立大学看護研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：看研倫12-29号）。

### IV. 結 果

#### 1. 研究参加者の概要

研究参加者は、男性7名、女性12名の計19名であり、その概要を表1に示す。

表1 研究参加者の概要

No	性別	年齢	がんの種類	同居家族	職業	退院後経過期間	治療方法
1	女性	40歳代	乳がん	夫	有	11か月	手術, 化学療法 放射線療法
2	女性	70歳代	膵臓がん	夫	無	10カ月	手術, 化学療法
3	女性	60歳代	胃がん	夫	無	2年3カ月	手術, 化学療法
4	女性	80歳代	乳がん	1人暮らし	無	1年3カ月	手術
5	女性	60歳代	胃がん	夫, 娘	無	1年9カ月	手術, 化学療法
6	男性	50歳代	胃がん	妻, 両親, 息子	有	3カ月	手術
7	女性	60歳代	乳がん	夫, 息子(3人)	有	3カ月	手術, 放射線療法
8	女性	50歳代	乳がん	夫	有	9カ月	手術, 化学療法
9	女性	70歳代	胃がん	夫	無	1年9カ月	手術
10	男性	50歳代	胃がん	妻	有	1年8カ月	手術
11	男性	70歳代	胃がん	妻	無	2年6ヵ月	手術
12	女性	40歳代	乳がん	夫	無	1年2か月	手術, 化学療法 放射線療法
13	女性	50歳代	乳がん	夫	無	3カ月	手術
14	男性	60歳代	膵臓がん	妻	有	1年1カ月	手術, 化学療法
15	女性	60歳代	乳がん	夫	無	2年6ヵ月	手術, 化学療法 放射線療法
16	男性	60歳代	膵臓がん	妻, 両親, 息子	有	1年	手術, 化学療法 放射線療法
17	男性	60歳代	大腸がん	妻, 母, 息子	無	1年11カ月	手術, 化学療法 放射線療法
18	女性	50歳代	乳がん	1人暮らし	有	1年5か月	手術, 化学療法 放射線療法
19	男性	60歳代	大腸がん	妻	無	3カ月	手術

2. 初発がんサバイバーのストレングスの全体像  
 分析から、初発がんサバイバーのストレングスとして2つのコアカテゴリー、カテゴリー、16のサブカテゴリーが抽出された。本文中の

“ ”はコアカテゴリー、【 】はカテゴリー、  
 ≪ ≫はサブカテゴリーを示す。太字斜線文字  
 で示している部分は、研究参加者の語りである。

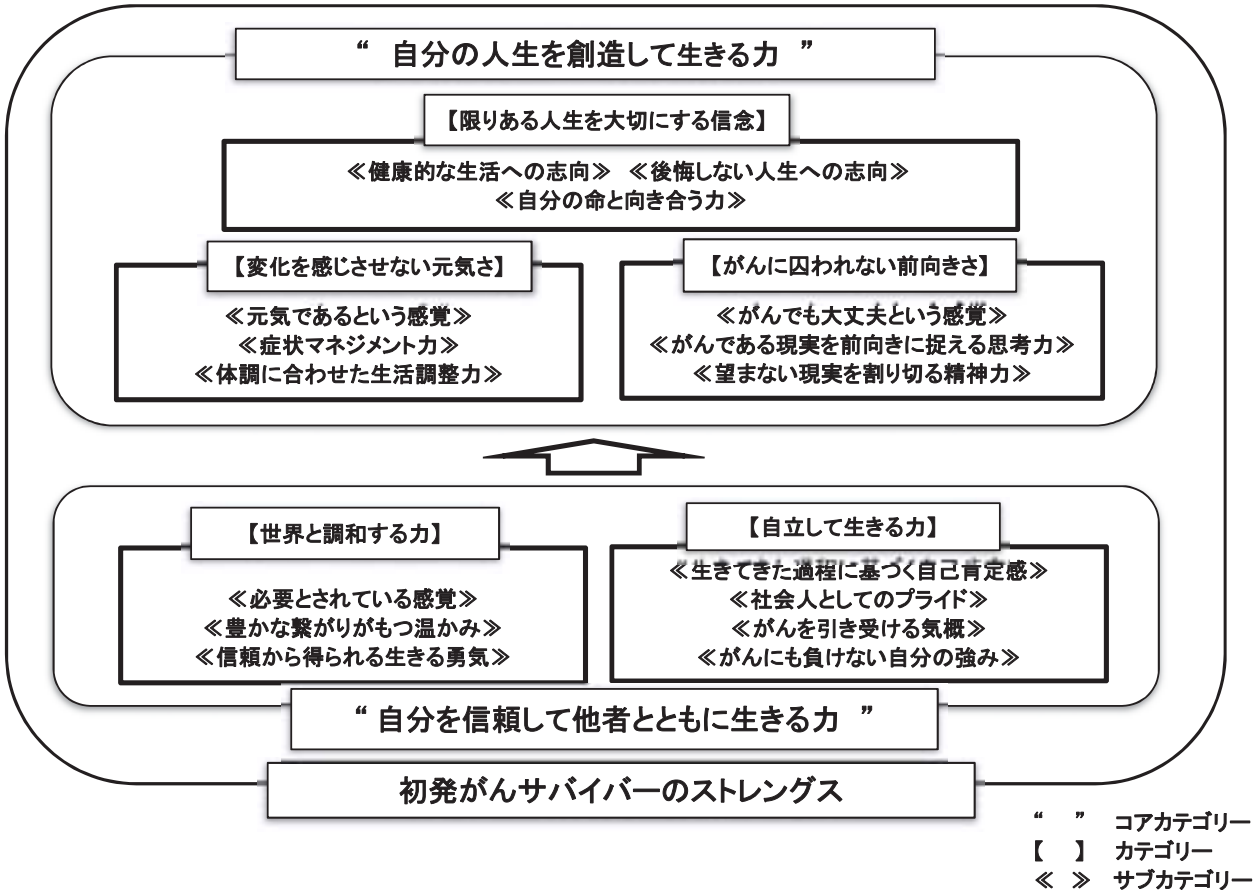


図1 初発がんサバイバーのストレングス

初発がんサバイバーのストレングスとして、“自分を信頼して他者とともに生きる力”と“自分の人生を創造して生きる力”が見い出された。“自分を信頼して他者とともに生きる力”は、生きてきた過程で培われた自分への信頼に基づく【自立して生きる力】と、この世界での居場所を獲得し、周囲と支え合うことのできる【世界と調和する力】から形成されていた。“自分の人生を創造して生きる力”は、がん治療に伴う症状をマネジメントし、体調に合わせた生活を無理なく送ることにより実感できる【変化を感じさせない元気さ】と、前向きな思考力と割り切る精神力で、がん罹患したことに伴う感情を切り替える【がんに関われない前向きさ】、健康的で後悔のない生き方を志向する【限りある人生を大切に作る信念】から形成されていた。

初発がんサバイバーは、“自分を信頼して他者ととともに生きる力”を発揮して、これまでと同様に周囲の人とともに自立した社会生活を送ることができていた。その生活が基盤となり、“自分の人生を創造して生きる力”を発揮することができ、がん罹患後の残された人生をより自分らしく生きていこうとしていた。

### 3. “自分を信頼して他者ととともに生きる力”

#### 1) 【自立して生きる力】

初発がんサバイバーは、「主人の面倒をみい、子どもの面倒をみい。お兄ちゃんも、浪人時代もあったので、その経験もし。その時に下の子が野球が忙しくなり。えらい時は、睡眠時間が2時間とか。(No.1)」と、自分の役割を果たしてきた経験等、自分の力を信頼できる経験を有しており、自分を肯定的に受け止めていた。また、「本人が性格的にそういうのはもう気にせん、気にせん。おおまかな感じやけん。神経質にならんけん (No.6)。」「たぶん私が、暢気な方だと思うので、(傷は) 気になりますけど、あるもんはあるんで、いつか薄くなるかなあとって (No.12)」と、自分の性格についても肯定的に受け止めており、自分を信頼していた。そして、初発がんサバイバーは、がんへの罹患について、「人に頼ってどうしようとかいいうのなかったし。後は自分で自分の身体治す

しかないなという風に思ってたからね。(No.14)」「えらかったとか、そんなこと私は言わないの。困ったもんでしょ。・・・強がりかしら。痛いとか、なんとかいうあたりは、言いたくないんですよ。自分でおさめたいんです。全部。(No.4)」と、自分で何とかしようとする気概をもって、自立して生きていこうとしていた。

【自立して生きる力】とは、《生きてきた過程に基づく自己肯定感》から自分を信頼し、《社会人としてのプライド》をもって社会生活を送り、《がんを引き受ける気概》と《がんにも負けない自分の強み》を活かして、がん罹患しても、自分の力で自立して生きていこうとする力であった。

#### 2) 【世界と調和する力】

初発がんサバイバーは、「もう2時間でも3時間でもおしゃべりした時は、自分ががんで手術して、生存率がなんぼっていうのを聞いたということは忘れていません。友達はすごく大事。(No.2)」「あなたの帰る場所はあるからね。はよ帰ってきてねって、それが一番なんか・・・。それで降り着くところはあるからね、仕事場でって言って。それやったら頑張るわみたいな感じで。(No.8)」と、周囲との豊かなつながりを有し、そのつながりはがん罹患したことによる不安を緩和し、生きる勇気となっていた。また、「(夫が) 私のことで寝られなくて、次の日仕事っていうのもかわいそうだし。ちょっとこれはえらくてダメやなっていう時はリビングに降りて、落ち着いてから(寝室に) 戻るとか。(No.4)」と、大切に思う相手を気づかいことができている、お互いを支えあう関係性を築いていた。初発がんサバイバーは、「(ドライブをして) 山の中で食べるからおいしく食べられるし。そんなんがほんまにお薬になったなど。少し元気になったんはお父さんのおかげやなあと(笑)(No.3)」「悩みも愚痴も言うし、悩み事があつたら、わーっと言って帰るし。楽しかったら、そこでわーっと言って笑って帰るし。それができる職場やから (No.1)」と、自分の居場所をもち、自分の人生を豊かに生きていた。

【世界と調和する力】は、がん罹患したこ

とにより、家族や友人、社会、自然など、この世界と繋がり、この世界で《必要とされている感覚》、これまで築いてきた《豊かな繋がりがもつ温かみ》や《信頼から得られる生きる勇気》を実感しながら、周囲の人々とともに豊かに生きていく力のことであった。

#### 4. “自分の人生を創造して生きる力”

##### 1) 【変化を感じさせない元気さ】

初発がんサバイバーは、「必ず家からおにぎりを2個くらいしてきて。おにぎり食べたら、しんどさがもうすぐなくなる。しんどい時のお米のご飯、バナナ。どっちか食べたら、早めに回復するから。(No.3)」と、自分の身体のシグナルを敏感に感じ取り、症状をマネジメントする力を有していた。また、「自由がきくような仕事やから。時間的にでも。ちょっと疲れとったら、今日はあんまりね。そういうことができるから。(No.6)」と、自分の体調を他者に理解してもらい、体調に合わせた生活ができるように調整する力を活かして、気兼ねなく自分の身体に負担がかからないような生活を送っていた。そして、「もう痩せて、今はもう、35キロ切っとなです。ほなけど、まあまあ元気で、家のことができてますから。(No.9)」**「四国参りを全部終わらせたんです。それがもう、ものすごく自分でもう元気になったいうあれですね。階段とかそんなとこばかりでしょ。それがもう参れたいうんが、自分の元気になったいう証です。(No.7)」**のように治療前と比べて変化したところもあるが、自分は元気であると感じていた。

【変化を感じさせない元気さ】は、《症状マネジメント力》と《体調に合わせた生活調整力》を活かして、これまでと変わらない生活が送れることにより、《元気であるという認識》を取り戻し、がん罹患してもこれまで通り元気に生きていけるだろうと思えることであった。

##### 2) 【がんに囚われない前向きさ】

初発がんサバイバーは、「小さい薔薇と。まあいい表現かなと思って。そういう表現と自分のこれ(ストマ)見たら愛しくなりますよ。初めはグロテスクだったけど。そういう風に変わる

ことがいいことじゃないかとね。(No.17)」**「現実からは逃れることはできんでしょ。色んな事考えたって、現実には現実で捉えていかなんたらしょうがない。逃げられんこと。自暴自棄になったって、現実には変わらんわけです。そう思わないかん、そう思います。(No.16)」**と、がんである現実とは本意なことであるが、自分ではどうにもできないことに対して、いつまでも悩むのではなく、深刻に考えず、きっぱり割り切ることによって、前向きに生きようとしていた。

【がんに囚われない前向きさ】は、《がんである現実を前向きに捉える思考力》と《望まない現実を割り切る精神力》で、がんに囚われないように自分をコントロールし、《がんでも大丈夫という感覚》を見つけて、ポジティブに生きていこうとすることであった。

##### 3) 【限りある人生を大切にする信念】

初発がんサバイバーは、「命は、自分の意思とは関係なしに、明日かもしれない。もう少し先かもしれないってことを現実を感じて。生き方を本当に変えなくちゃいけないんだって。生き方の再確認ですよ。(No.13)」と、がんをきっかけに自分の死を現実として捉えたり、これからの生き方を真剣に考えるなど、自分の命と真摯に向き合っていた。また、がんに罹患したことで、「絶対再発しないという保証はないから。そんなを抱えて、もうテレビ番組は、医療関係の番組ばかり見えます。なるべく選んで。時間があったら。勉強しようという感じで。(No.5)」と、健康的な生活に、改善しようと心がけるようになり、自分にできる健康行動を見出し、無理なく生活に取り入れていた。さらに、「このままうまくいかなんたら命がないなあ思て。豪華客船乗って、3泊4日の旅行に行った。(No.16)」と、自分の人生を後悔しないように、楽しみや生きがいを見つけ、自分の人生を大切に生きようとしていた。

【限りある人生を大切にする信念】は、《自分の命と向き合う力》を活かして、自分の人生を真剣に考え、《健康的な生活への志向》や《後悔しない人生への志向》を見出し、人生には限りがあることをふまえて、自分の人生を大切に生きようとする信念のことであった。

## V. 考 察

### 1. 初発がんサバイバーの発揮する力

初発がんサバイバーのストレングスを明らかにすることにより、2つの生きる力が発揮されていることが明らかになった。

“自分を信頼して他者とともに生きる力”は、社会の一員として自分の役割を果たし、様々な人と関わりながら、自立した社会生活を営んできた過程で、自然と培われてきたものであった。そのため、誰もがもつストレングスといえるが、普段の生活では当たり前のものであり、本人が意識していない潜在的なストレングスと考えられる。しかし、がんへの罹患は、自分の命に限りがあることを実感し、自分の人生について真剣に考えるきっかけとなっている。がんの軌跡において、初発がんサバイバーは人生を振り返り、様々な経験乗り越えてきた自分自身への信頼や、周囲の人たちから必要とされていることを実感することにより、“自分を信頼して他者とともに生きる力”が認識され、初発がんサバイバーのストレングスとして発揮されたと考えられる。終末期においても人とのつながりが生きる意志を支える方向に働いたこと（水野，2003）、自らの力を信じるという生き方の本質が終末期に見られたこと（黒田ら，2008）等、終末期において同様の結果がみられた。これは、がんの告知や終末期が自分の死を意識化する状況であるという類似点があるためと考えられる。“自分を信頼して他者とともに生きる力”は、自らの死を意識する局面において発揮され、そうした局面においても自分の力で豊かに生きることができるストレングスであると考えられる。

“自分の人生を創造して生きる力”は、がんと診断される経験を通して、自分の命と真剣に向き合い、がんに関わらず自らの人生を大切に生きていこうとする中で生み出されたストレングスである。先行研究においても、がんを診断され、手術を受ける過程で、がんサバイバーがこれまでの自分の人生を見直し、新しい生き方を見出していることが報告されている（中條ら，2007；神津ら，2007；浅野ら，2003）。初発がんサバイバーにとって、がんを告知されることは、自分の人生に限りがあることを実感し、自

分がこれからどう生きたいのかを考える機会となっている。そのため、“自分の人生を創造して生きる力”を発揮することにより、自分自身のための後悔のない生き方へと転換しており、より自分らしく生きることができていると考える。その生き方を支える原動力として、今回の結果から、【変化を感じさせない元気さ】と【がんに関われない前向きさ】が明らかになった。終末期においては、元気になりたいという願いが、生きる力を支えていた（中村，2002）が、初発がんサバイバーは、自分が元気であるという感覚をもっていた。これは対象を再発や転移の徴候がない者に限ったため、初期治療による身体症状や、生活を変えることになったとしても、これまで通りの自立した社会生活を送ることができていたためと考える。さらに、若崎ら（2006）は、がんを診断を受けることによる様々な困難に直面する現実において、自身にとって困難でつらく脅威的な状況にあっても容易に屈することなく、それ乗り越える精神的な回復力として前向きさを報告している。本研究においても、がんに関われないことで、自分の人生を前に向かって進む力として前向きさを捉えられ、初発がんサバイバーは元気さや前向きさが自分の人生を力強く生きていくためのエネルギーになっていたと考えられる。“自分の人生を創造して生きる力”は、がんへの罹患という危機的な状況を経験する中で、自分の人生を健康的で、後悔のない、自分らしいものへと転換させるストレングスであるといえる。

ストレングスは、潜在的なものや新たに作り出されるものも含まれ、個人に無限に存在するものである（Walter，2009；Rappら，2006）。初発がんサバイバーもまた、がん罹患をきっかけに潜在的に持つストレングスを認識し、さらに新たなストレングスを生み出すことによって、自分の力を発揮していたと考えられる。ストレングスの視点からがんサバイバーの力を捉えることは、自分の力を発揮しづらい状況においても、無限に存在するがんサバイバーの力を見出すことを可能とし、自らの力で豊かに自分らしく生きることを支援できると考える。

## 2. 看護への示唆

初発がんサイバーは、がんへの罹患を経験することにより、これまでの人生を見つめ直し、これからの生き方について真剣に考えており、より豊かで自分らしい人生へと転換させる力を持っている。その力を発揮できるように支援するためには、初発がんサイバーが人生を振り返る中で、他者とともに自立して生きてきた自分の力を想起し、がん罹患した後の人生もこれまでと同様に生きていけるという感覚が持てるように支援することが重要と考える。生きてきた過程には、その過程で培われた強みが多くみられるため、看護者が初発がんサイバーとともに人生を振り返り、その語りの中で強みを見つけ出し、共有していくことで、初発がんサイバーはがんに関わらず、これからの生き方に目を向け、前に進むことができると考える。

## 3. 研究の限界と課題

本研究の対象は再発や転移のない初発がんサイバーとした。そのため、治療や治療に伴う障害や副作用などの多様な問題を抱えるがんサイバーのストレングスは未だ明らかではない。今後は、転移や再発の時期、終末期など、より大きな苦悩を抱えることが予測される時期にあるがんサイバーのストレングスを明らかにするとともに、具体的な看護への示唆をしていく必要があると考える。

## VI. おわりに

初発がんサイバーは、ストレングスを発揮することによって、がんと診断されてもがんを自ら引き受け、豊かな繋がりを実感しながら、がんに関わらず、前向きに、自分の人生を力強く生きていた。看護者はがんサイバーを社会の中で自立して生きている一人の人間として捉え、その生きてきた過程を尊重し、がんサイバーの元気さや前向きさを支えていくことが重要である。

## 謝辞

本研究への参加を快く引き受けて下さり、ご自分の体験を力強く語って下さったがんサイ

バーの皆様にご心より感謝いたします。また、本研究の主旨をご理解いただき、ご支援下さいました協力施設の皆様にご心より感謝いたします。

本研究は、平成27年度高知県立大学大学院看護学研究科に提出した博士論文に加筆・修正しを加えたものです。また、本研究の一部を第31回日本がん看護学会学術集会と19th East Asian Forum of Nursing Scholars において発表しました。

本研究において申告すべき利益相反事項はない。

## <引用文献>

- 浅野美知恵, 佐藤禮子 (2003). がん手術後2年から3年経過した患者とその家族員の社会復帰過程における自分らしさの回復. 順天堂医療短期大学紀要, 14, 13-24.
- Becky F., Rosemary C. (2000) / 青木信雄, 浅野仁訳 (2005). 高齢者・ストレングスマデルケアマネジメント ケアマネジャーのための研修マニュアル, 19-40. 東京: 筒井書房.
- 中條雅美 (2007). 乳がん患者が情報を取り入れつつ生活を再構築する過程を促進する構造契機とソーシャルサポートとの関係. 福岡県立大学看護学研究紀要, 4 (2), 45-53.
- Cowger C. D. (1994). Assessing Client Strengths: Clinical Assessment for Client Empowerment. Social Work, 39(3), 262-268.
- 岩本真紀, 藤田佐和 (2013). ストレングスの概念分析—がんサイバーへの活用—. 高知女子大学看護学会誌, 38 (2), 12-21.
- 神津三佳, 佐藤まゆみ, 佐藤禮子 (2007). 肝切除術を受けたがん患者の回復への取り組みと看護援助. 千葉看護学会誌, 13 (2), 19-26.
- 黒田寿美恵, 佐藤禮子 (2008). 終末期がん患者の選択する生き方とその本質. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 8 (1), 89-100.
- Miley K. K., O'Melia M., DuBois B. L. (1988). Generalist Social Work: An Empowering Approach, 205. Boston: Allyn and Bacon.



- 水野道代 (2003). 長期療養生活を続ける造血器がん患者にとっての希望の意味とその構造. 日本がん看護学会誌, 17 (1), 5-14.
- 中村陽子 (2002). 高齢患者のがん体験の意味付けの理解. 日本看護医療学会雑誌, 4(2), 27-35.
- Rapp. C. A., Goscha R. J. (2006) / 田中秀樹 (2008). ストレングスモデル 精神障害者のためのケースマネジメント (第2版), 59-102. 東京: 金剛出版.
- Rotegard A. K., Fagermoen M. S., Ruland C. M. (2012): Cancer patients' experiences of their personal strengths through illness and recovery, *Cancer Nursing*, 35 (1), 8-17.
- 須田利佳子 (2008). がん告知後に手術療法を受ける患者のストレス体験とその変化. 上武大学看護学部紀要, 3, 1-15.
- 若崎淳子, 掛橋千賀子, 谷口敏代 (2006). 周手術期にある乳がん患者の心理的状況 初発乳がん患者により語られた内容の分析から. 日本クリティカルケア看護学会誌, 2(2), 62-74.
- Walter E.K. (2009). *The Opportunities and Challenges of Strengths -Based, Person-Centered Practice: Purpose, Principles, and Applications in a Climate of Systems Integration*, Saleebey D., *The Strength Perspective in Social Work Practice (Fifth Edition)* .47-71, Boston, Allyn & Bacon.
- 山口真理 (2009). ソーシャルワークにおけるストレングスの特性-類似概念との比較をつうじて-. 広島国際大学医療福祉学科紀要, 5, 65-78.